

社会人参加型授業「名著講読」における学習支援の課題

—「プロフェッショナル」をテーマとした世代間交流を通して—

香川 順子*・中恵 真理子**

Key factors for enhancing significant learning in the General Education Class:
“Seminar for Reading Great Books” in the theme of “Professional”
through generational interaction with the members of the community

Junko KAGAWA and Mariko NAKAE

要約:

高等教育において、学位授与方針の具体化・明確化が課題となり、学生の学習経験をどのように提供していくか、汎用的な能力の育成方法、学生の学習成果をどのように評価するかといったことが重視されている。これらの状況を受け、社会人参加型の新たな教養教育として「名著講読」という授業を実施するに至った。この授業は、「プロフェッショナル」をテーマとして、地域社会人と学生が交流しながら学習を進めていくものである。

本稿では、新たな取り組みである本授業の課題を明らかにすることを目的とした。学習経験に関する事後アンケートの結果から、意義ある学習を促進するために、参加者間のディスカッションの支援を行うこと、またアカデミックスキルについては、特にコミュニケーションスキル、プレゼンテーションスキルについて、学生が一人で出来ないことを出来るように足場かけをすることが課題としてあげられた。

1. 背景

近年、国際化、高度情報化社会を迎えた現代社会において必要なコンピテンシー（能力）に世界的な注目が集まる¹⁾とともに、それに対する大学教育の在り方が問われており、新たな能力を育成するために、どのようなカリキュラムや学習環境を構築し、その中でどのように学習成果を評価していくかが課題となっている。²⁾

我が国では、2008年より「学士課程教育の構築に向けて」（文部科学省3月25日審議まとめ、12月24日答申）が提示され、その中で、「学士課程共通の学習成果に関する参考指針」として「学士

*徳島大学大学開放実践センター

**徳島大学全学共通教育センター

力」が提示された。その内容は、「1. 知識・理解（文化，社会，自然等）」、「2. 汎用的技能（コミュニケーションスキル，数量的スキル，問題解決能力等）」、「3. 態度・志向性（自己管理能力，チームワーク，倫理観，社会的責任等）」、「4. 総合的な学習経験と創造的思考力」といったように，知識習得とその理解，領域を横断して必要な汎用的な力など，総合的な力があげられている。

こうした背景をもとに，徳島大学では学士力に示されているような力を育成するための学士課程教育の取り組みが始められた。具体的には，学生を中心とした学習環境の構築を行い，学びのコミュニティの中で参加者が主体的に学んでいく学習スタイルをとる科目の設置である。本稿ではその科目について一つの事例を取り上げ，報告する。

本稿で取り扱う「名著講読」は，平成20年度質の高い大学教育推進プログラム³⁾「地域社会人ボランティアを活用した教養教育」⁴⁾の一環として授業が位置づけられている。同時期に，全学共通教育において徳島大学の教育理念の下に「社会性形成科目群」が新設された。その目的は，「さまざまな体験を通して，人間力や社会性を身につけ，進取の気風を育む」ことである。この「社会性形成科目」の一つが，「名著講読」である。この授業は，本を通して現代社会を生きるための教養を身につけることをねらいとした授業であり，学生，社会人，教員が対等な立場から参加し，授業を形創るものである。特に，社会性形成のために，社会人との交流を重視した学習スタイルをとっており，教員は自由にテーマを設定して授業を実施することができる。

この授業に参加する者を大学における学びのコミュニティの一員としてとらえ，それぞれ次のねらいが設定されている。学生は，自主的な学習態度を育むと共に，人間力や社会性を形成する。教員は，学生や社会人と共に学ぶことにより，さらに幅広い分野において教育力を身につける。社会人は，学生の教育に参画することにより，生涯学習の動機付けを図りながら，学びを深める。これらのねらいをもとに，社会人の参画を通して新たな教養教育の構築へ向け，多様な活動が展開されている。

一方，我が国においては，大学のユニバーサル化に伴い，多様な学生が入学すると共に，学力低下，学生の目的意識の希薄化など，初年次へ対する支援が必要になってきている。特に学士課程教育においては，初年次教育の構築が課題となっており，教育評価を含めた新たなカリキュラム，教育制度を構築することが喫緊の課題となっている。⁵⁾このような状況の中，初年次の学生に必要な支援をどのように行うか，学生の学習経験とその成果をどのように卒業資格へ繋げていくかについて，各大学が考えていかねばならない。特に入口，出口の支援だけではなく，大学4年間の学習経験，学習過程を視野に入れ，先に述べた汎用的な能力を育成するための支援を行うことが必要である。

現代社会における汎用的，総合的な力としての「生きる力」は，現在活躍する「プロフェッショナル」のパフォーマンスからその糸口を読み取ることができる。初年次の段階から将来へ向けての目標を意識するとともに，今何をすべきか，そして大学生活を通して何をすべきかを考え，学びのアイデンティティを確立し，それを仕事と結びつけて考えられるようになることが現代の大学生に

求められているのである。

以上の背景をふまえて、本稿では「プロフェッショナル」をテーマとしたひとつの「名著講読」の事例を取り上げ、汎用的、総合的な力を育成するための教育プログラムの開発を目指すために、まずはこの授業における学習の意義について整理し、授業改善の課題を明らかにすることを目的とした。その方法として、事後アンケートから授業の効果について考察し、よりよい学習環境の構築へ向けて、今後の授業実施における課題をまとめる。

2. 授業概要

本稿で取り上げる「名著講読」の事例では、NHK テレビ番組の「プロフェッショナル仕事の流儀」をテーマとして、プロフェッショナル（専門職）とはどのようなものかを参加者同士で議論しながら考えていくものである。

授業の目的は、世代の違う社会人との交流を通して自己実現に向けての自分を意識し、大学で何を学ぶべきか意識し、計画できることとした。

授業内容は、表1のとおりである。初めに、受講に関する説明と授業の予定を説明した。2～3回目では、簡単な自他理解のワークショップを行い、参加者は他者との交流を通して自分について考え、人との交流の仕方を学ぶ。また、参加者の意見を聞きながら、授業をどのように進めていくかについて決定した。

4回目～13回目の授業では、文献「プロフェッショナル仕事の流儀」⁶⁾の中から、各自興味のある仕事を選んで発表し、全体で議論した。具体的には、毎回の授業で2名の担当者がそれぞれのテーマに基づいてレポートを作成し、ひとり20分～30分の発表を行った後、全体で10～20分の議論を行った。参加者が選んだ職種は、表1に示すとおりである。文献講読の他、社会人や教員（研究者）の仕事の紹介やプロフェッショナルの番組視聴も取り入れた。参加者は学生（1回生）が4名、社会人（大学開放実践センター公開講座に関わる社会人）が3名であった。

表1 授業内容

<p><時期> 2008年度後期 火曜9・10限 「名著講読」</p> <p>【1回目】 導入（授業の説明、今後の予定）</p> <p>【2～3回目】 自他理解ワークショップ、授業準備（授業の進め方、発表手順の確認）</p> <p>【4～14回目】 プロフェッショナル 仕事の流儀</p> <p>①宮崎駿のすべて（VTR）、②料理人・弁護士、③脳神経外科医・中学校教師、④ベンチャー経営者・パティシエ、⑤科学者・小児外科医、⑥経営者・映画プロデューサー、⑦編集者・ウィスキーブレンダー、⑧社会人による経験談（職業意識）・脳活用法スペシャル（VTR）、⑨担当教員による経験談（研究者）・脳活用法スペシャル（VTR）、⑩リゾート再生請負人、鍼灸師、⑪バレエダンサー（VTR）</p> <p>【15回目】 まとめ</p>

次にある日の授業の様子を具体例としてあげながら、社会人、学生の様子、教員の関わり方について説明する。

まず教員がその授業で取り扱うテーマと担当者について簡単に説明し、参加者へ進行を受け渡す（ここでは社会人、学生各1名が担当）。はじめに社会人より、自身が作成したレジュメをもとに、テキストの中から一人の「プロフェッショナル」を選択して紹介する（20分）。その後、質疑・応答の時間をとり、ディスカッションを行う（20分）。そこでは参加者から質問がなされ、議論が展開する。議論については、教員が適宜支援を行いながら進めていった。

この日、発表者からは日本と他国の雇用制度を比較した表が提示され、以前の日本の雇用制度とアメリカに代表されるような能力主義の雇用制度について発表の中で説明があった。丁度この頃、リーマンショックの影響による派遣切りや解雇者のセーフティネット対策が世間で注目されていた時期であり、新たな雇用制度の問題について話されたり、この不況の中、大学を卒業するまでにどのような能力を身につけ、今何を勉強すべきなのかについて話されたり、あるいは夢の仕事を目指すのか、堅実的な仕事で妥協すべきなのか、といったことなどが話されたりした。授業前半の担当者の時間が終わる頃になると、教員が議論に対する感想やまとめを簡単に行い、次の発表者へと発表を受け渡す形で介入する。

後半は、学生が選んだ「プロフェッショナル」を紹介しながら、夢を実現するためにどのようなビジョンを持つのかをテーマとしたレジュメが提示され、発表が行われた（20分）。その後、質疑・応答の時間をとり、ディスカッションを行う（20分）。

この日のテーマは企業に関する話となり、仕事を経験している社会人を中心に質問や議論が展開した。社会人が、自身の経験をもとに、仕事に対する想いを語り、大学一年生の段階からビジョンを意識していることはすごいことといったコメントもなされた。その他、学生からは、実際に働くことはどのようなものか質問がなされた。

この日の授業では、雇用制度の問題、夢を実現するためにビジョンをどのように持てばよいかという話が議論のテーマとして持ち上がり、「プロフェッショナル」の文献から様々な話が展開されていた。

よく見られた発言としては、社会人はこの不況の中、学生達が頑張っていかなければならないことに対して声援を送る形であった。とても大変な社会になるけれども、そこで生き甲斐を見つけ、楽しみながら仕事をしていくこと、自分の専門をしっかり持って、幅広い知識を身につけることの大切さ、自立して生きていくことは大変であるが、やろうと思えばできることなどの内容のコメントがよく聞かれた。

学生からは、今後の社会へ対する不安、今何を考え、何を行動として起こせばよいのか、本当にやりたいことを選ぶべきなのか、自分の進路をどうすればよいかなど、社会人に対する相談という形で質問やコメントがなされていた。

教員は、学生の遠慮がちな姿勢や自信のない発言に対して、間違いを恐れたり、良いことを言わ

なければならないと考えたりせず、自由に思ったことを発言していけばよいこと、自分から進んで発言をしにくい学生に対しては、教員が質問をする形で自分の考えを述べてもらうなどの配慮をしながら、議論や発言のコーディネートを担う役割として関わっていた。

このような発表と議論の中で、授業の参加者を中心として進めた。授業を進める上での手続きや方法を伝え、教員がコーディネーターとして参加者と関わり、議論を進めていく形式であった。

3. 結果と考察

(1) 事後アンケートの実施

授業終了後、この授業における学習の意義の事後アンケートを行った（世代間交流，自己実現，授業全体について）。項目については表2に示すとおりである。項目1から3は世代間交流，項目4から7は自己実現，項目8，9は，授業全体に関する意見等について聞いた。項目2，5，6，7（表2〇の箇所）については，5件法と合わせて具体的な事柄について記述する形式をとり，項目8，9については，自由記述のみとした。

5件法では，評価項目1から7について，「該当する（5点）」、「どちらかという該当する（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「どちらかという該当しない（2点）」、「該当しない（1点）」と数値化した。その平均値と肯定的評価の人数，割合を，表2に示す。

まず，各項目の平均値についてみると，項目7，2の順に評価が高く，項目1と3～6については，他と比較して平均値が若干低い。多くの参加者が4（どちらかという該当する）あるいは5（該当する）の評価をしており，「該当しない」「どちらかという該当しない」を選択した者はいなかった。

表2 授業評価

評価項目	平均	肯定的評価 (人数, 割合)
1. 世代の違う参加者とよく話をした。(授業中や授業前後のコミュニケーション)	4.3	7名, 100%
2. 世代の違う参加者との交流を通して，新しい発見があった。○	4.7	6名, 100%
3. 多様な価値観を認められるようになった。	4.4	6名, 86%
4. プロフェッショナルとは何か意識するようになった。	4.4	7名, 100%
5. 自分の生き方について考える機会となった。○	4.4	6名, 86%
6. 自分の仕事について考える機会となった。【学生のみ】○	4.5	3名, 75%
7. 今自分がすべきことについて考えるようになった。【学生のみ】○	4.8	4名, 100%
8. 授業をふりかえって学んだこと，気づいたことなど（特に世代間の交流を通して）	自由記述のみ	
9. 感想，改善点などがあれば記入してください	自由記述のみ	

・肯定的評価は，「該当する」「どちらかという該当する」の2つを選択したものであり，数値は項目ごとの回答数に対する肯定的評価の人数と割合を示す（学生4名，社会人3名の参加者全員が回答している）

・○は自由記述によって具体的な事項を聞いた項目，ゴシック体は評価が比較的高かった項目を示す

これらの各評価項目に関する数値と、具体的な自由記述をもとに、本授業での学習の意義について、授業担当者の立場から考察を進める。なお、自由記述の下線部は筆者によるものである。(自由記述には、各項目について番号をふっている)

(2) 世代間交流の意義

まず、世代間交流の意義について、項目1～3の5件法のデータ、自由記述により考察する。

項目2については、評価の平均が2番目に高く、回答者全員が肯定的に評価しており、全体的に評価の高い項目であった。このことから、学生、社会人共に新たな気づきがあったことが推察できる。次に自由記述をもとに、考察をすすめる。

学生は、世代の違う社会人との交流を通して、今の学生と社会人の経験した学生時代の違いについて知り、考え方の違いや社会の仕組みなどが違うことに気づいている(自由記述2.1, 2.2, 2.4以下同様)。経験豊富な社会人から直接話を聞くことで、社会人の持つ知識や経験の違いを知り、「自分の無知さを発見した」(2.3)ことや「普段なかなか聞くことが出来ない」(2.4)話を聞くことで、貴重な体験となったことが分かる。

社会人については、現在の学生が感じていることや考えていることを知り、学生が生きていく上で、また今後大学生活を送る上でのよき理解者となっていることが窺える(2.5, 2.6)。授業においては、学生の悩みや不安に対してアドバイスをしたり激励したりする場面が見られ、支援者としての立場から学生と接していた様子が窺えた。

しかし学生は、世代の違う社会人と話すことを遠慮していたようだ。項目1の授業や授業の前

■ 項目2. 世代の違う参加者との交流を通して、新しい発見があった

【学生】

- 2.1 世代が違うのでそれぞれの学生時代の違いや、社会での話、考え方が知れた。
- 2.2 社会人の方々が学生時代のときと私達の学生時代のときとでは、社会のシステム等が変わってきているということ。
- 2.3 自分の知らないことを深くまで知っていて、自分の無知さを発見した。
- 2.4 社会人の方々が私たちと同年代の頃、何を考えて過ごしていらっしやったか、ということや、職場という仕事の現場での、普段なかなか聞くことが出来ない貴重なお話を伺えたことは、良い刺激となった。

【社会人】

- 2.5 最近の社会状況から若い人達を取り巻く環境(例えば就職など)が厳しさを増す中で、将来にとまどいを感じている様子が察しられ、心から声援をおくりたいと思った。
- 2.6 私たちが現役だった時と社会情勢は変化し、不安定で、希望の持てない事が見られる。その一方見出そうとすれば、これもあるはずだと思う。

後で「世代の違う参加者とよく話をした」かどうかについては、全員が肯定的に評価しているものの、平均が一番低かった。自由記述では、9.2「自分の考えはあまり発表できなかった」学生や、9.7のように、学生の発言が少なかったという記述がみられる。これは授業の始めに、学生の発言が少なく、社会人の話を聞く場面が多かったことが影響していると考えられる。しかし、授業の後半では、学生の発言が徐々に多くなり、社会人とのコミュニケーションも増えた。世代の違う社会人と接することに慣れていない学生にとっては、始めは少し抵抗があったようだが、授業中や休み時間での話を通して少しずつ抵抗がなくなり、最後にはもっと話せばよかったと後悔する者もいた。8.3を見ると、「積極的に話しかけられなかったことに悔いが残る」という学生もいる。この変化は、学生を理解し、支援しようとする社会人の態度が大きく影響していると考えられる。

また世代の差というのは、同年齢同士と比較して、考え方や価値観が異なってくる。この授業の中では、学生、社会人共に他者の経験を自分に置き換え、「自分だったらどうか」と考える場面が見られた。また、学生は経験豊かな社会人の話から「今の自分はこれでよいのか」といった問いかけが自分に向けてなされていたようである。一方、項目3「多様な価値観を認められるようになった」を見ると、7名中6名が肯定的に評価しており、1名が「どちらともいえない」と評価している。世代の違う社会人との交流を通して、多様な価値観と考え方を知ることができたようである。そしてその経験が学生にとって「良い刺激」となっていたことを考えると、社会人の経験を理解し、それを自分の経験に活かすきっかけとなったのではないかと推察する。しかし、中にはそこまで到達しなかった者もいたようである。

このような世代の違う参加者間の交流を通して、学生、社会人はそれぞれの生き方とその時代背景や文化を理解し、他者の経験を自分に置き換えてみたり、自分へ問いかけたりしたことで、新しい自分への気づきが促されていたようである。

(3) 自己実現的態度の促進

次に、自己実現的態度について項目4～7の5件法のデータ、自由記述により考察する。

まず項目4「プロフェッショナルとは何か意識するようになった」については、全員が肯定的な評価をしており、新たな時代に求められる専門職について意識する機会となったようである。「プロフェッショナル仕事の流儀」では、ある一人の専門職の人について取り上げ、その人ならではの生き方と共にその中で培われた仕事の流儀が具体的に紹介されている。こうした題材を取り扱うことは、学生、社会人共に意味があったようである。

項目5については、参加者7名のうち、6名が肯定的に評価しており、1名が「どちらともいえない」と評価していた。参加者の大半が自分の生き方について考える機会となったようであるが、一方そこまで到達していない学生もいたようである。次に自由記述をもとに考察をすすめる。

学生は、自分の人生について、自身の進路、夢、仕事、生き方の改善、仕事に対する姿勢、信念や価値観の持ち方、大学生活の中で今やるべきことなどを考える機会となったようである。これら

■ 項目5. 自分の生き方について考える機会となった

【学生】

- 5.1 将来について、きちんと考えなくてはいけない。自分の生き方を改めなければいけないと思った。
- 5.2 どうしたら自分が楽しんで仕事できるか。
- 5.3 今は大学1年生ですが、今後の大学生活をどのように過ごしていったら良いかということや、その後、院に進学するにしても就職するにしても、何を大切にしてどのように志を持っていたらいいかということを考えるきっかけになった。

【社会人】

- 5.4 私は、古い就社（就職ではない）という形態で仕事に就いた。職命でやれと言われるまま、IT業務に35年間従事した。一生懸命にやったが、自分の意志とはかかわりのない仕事だった。今回の授業では、自分の意志で仕事に取り組み、やりとおすというまさに“天職”というべきプロフェッショナルの仕事を学び、その生き方に感動するとともに、私ももう一度機会があれば…と思う。
- 5.5 現在は仕事から退いているが、後世代の人々へ助言が出来れば社会貢献になるものと思う。

から自分の生き方や将来について考える意識が促進されたことが窺える。

社会人は、これまでの人生をふり返って、生きることの意義について再び問い直し、今後どのように過ごすか考える機会となったようである(5.4)。そして、この授業を、社会人の知識や経験を活かす場としてとらえ、社会貢献の機会(5.5)としてとらえている。

自分の生き方については、学生・社会人ともに自己実現的な態度が促進されていることが分かる。社会人は過去を振り返り、就職ではなく就社だったとし、今後の人生を自己実現という軸で考えたいとしているのに対し、学生は、仕事というものが自己実現の軸上にあり、そこから今大学生活で何をすべきかを考えている。

項目6については、学生4名中3名が肯定的に評価しており、一人が「どちらともいえない」と評価している。学生にとって、現代に求められる「プロフェッショナル」とは何かを考えたことがよい刺激となり、仕事へ対する想いや夢へ向かおうとする姿勢が読み取れる。特に、身近な社会人から、これまでの経験に基づいた話を直接聞いたことで、働くことがどういうことなのか、現実感のある話として感じられたようだ。しかし一方で、自分の仕事について考えるというところまで到達できていない学生もあるようだ。

項目7については、学生全員が肯定的に評価しており、今自分がすべきことについて考えるようになったようである。

学生は、学問領域を超えた学びの中で、領域や視野を広げて考えるきっかけとなったこと、プロフェッショナルと言われる人の行動特性や考え方を学んだことで、自分が職業人として現代社会の中で生きていくには、今何が必要かを考えるきっかけとなっている。そして将来の自分のために学ぶ意欲が促進されていることが窺える。

■ 項目6. 自分の仕事について考える機会となった【学生のみ】

【学生】

- 6.6 自分の夢の実現に向けて今できることを頑張らなくてはいけない。
- 6.7 その職業のプロフェッショナルな考え方を知ると、やはり刺激を受けた。
- 6.8 いろいろな話を聞くことで、頭で分かるだけでなく、感覚として職に就くことの大変さが分かったような気がした。

■ 項目7. 今自分がすべきことについて考えるようになった・【学生のみ】

【学生】

- 7.1 政治や経済など、苦手だった部分のことについても目を向け、色々考えるようになった。
- 7.2 自分が就きたいと思っている職業の情報収集や日々の勉強をがんばりつつ、社会に関心をもち、自分の将来についてもできるだけ具体的に考える。
- 7.3 社会科学や英語を学びながら、たくさんの経験をし、そこから得るものを大事にすること。
- 7.4 資格を取ることや、英語を勉強することなど、就職難の時代を生き抜いていくためのスキルを身につける努力をすべきだと思った。自分の専門分野を人に分かり易く話せるようになるまでつきつめていくべきだと思った。

社会や職業への関心が助長され、自分の目標を考えた上で、将来へ向けて今自分がすべきことを具体化しようとしていることが読みとれる。この授業をきっかけに、具体的な行動のレベルでの自己実現的態度が促進され、自己実現における学びについて考える機会となったようである。

以上のように、項目4から7を通して見ると、学生にとっては、これから仕事をする上で何を大切にし、どのような目標を設定するか、目標達成のために今何をすべきかなどを現実的に考えるきっかけとなったこと、社会人にとっては、今までの人生を振り返り、これからの人生を歩むための信念や生きがいを考える機会となっていたようだ。学生、社会人共に興味を持って参加していたことを考えると、両者がそれぞれの視点で「プロフェッショナル」について関心を持ち、そこから意味のあることを学びとって自身の学びへつなげていっていることが窺える。

(4) 授業全体を通して

■ 項目8. 授業をふりかえって学んだこと、気づいたことなど。(特に世代間の交流を通して)

【学生】

- 8.1 プロと呼ばれる人々も挫折やスランプを味わいながら、今の状況まで来ていると改めて感じ、自分も少しのつまずきで諦めてはいけないと思った。又、良い状態にあっても妥協せず、より良い次元を目指す気持ちも大事だなと感じた。先生以外にかなり年の離れた人と話す機会はなかったので、良い経験になった。

- 8.2 社会人の方々は色々な知識や考え方をもっていて、すごいなあと思いました。私もただなんとなく生きるだけでなく、いろんなことに関心をもち自分なりの考えをもったり、様々な方の考え方を知ったりしないといけないと思いました。
- 8.3 社会人の方々と話す機会なんてめったになくて貴重なのに、自分からは積極的に話しかけられなかったことに悔いが残るが、これをまた次に生かしたい。
- 8.4 社会人の方と一緒に授業を出来ることはとても珍しいと思い、選択したのですが、すごく刺激を受けることが出来ました。自分がいかに無知であるかということも改めて認識したので、今後、幅広く学んでいけたら良いと思いました。いろいろなことを乗り越えて来られた社会人の方々のお話は、やはり説得力があり、派遣が主流ようになってきている今、何十年も1つのところに勤め続けることのすごさというのも改めて考えさせられた。

【社会人】

- 8.5 学生も1年生ということから、社会人（しかも老人の）とは話をしにくい様子が感じられたので、できるだけこちらから話しかけるように努めたところ、少しずつ話が進むようになったと思う。今後も若い人との話を積極的にしたいと思います。
- 8.6 社会人が私を含めて‘しゃべり過ぎた’感があります。反省すべきで、もっと学生さんが意見を出しやすい状況を作ってあげるべきだった。確かに我等社会人からすれば、‘おせっかい’かも分からないが、良かれと思って皆さん言われたと思う。最近の学生さんは、おとなしいと言うが、まさしくその通りと思った。もっと自分の考え、意見を堂々と言ったら良いと思った。
- 8.7 参加者は少数ながら、中味のしっかりある内容で有益な学びだった。

授業全体を通して、学生は、あきらめず、粘り強く努力し、よりよい自分を目指すことの大切さ、生き抜くためのスキルを身につける必要生、幅広い領域や多様な考え方を知ることの必要性を理解し、自分の専門分野への意識や学ぶことへの意欲が促進されていること、社会人との交流に刺激を受け、この貴重な体験を次にかしていこうとする意欲がみられる点については、世代間交流における学習の重要性が読み取れる。

一方社会人は、学生へ対して戸惑いを持ちながらも、学生へ歩み寄り、支援していこうとする姿勢が見られ、積極的に学生と関わろうとする意欲が読み取れる。また、授業内容についても満足しているようで、学生だけではなく、社会人にとっても意味のある体験であったようだ。

以上にあげたように、全体を通して、学生、社会人の相互理解が促進され、「学生と社会人の交流」が成功していることが分かる。学生は、社会を生き抜いた人の体験から生まれた「人生と社会」への生き生きとした洞察に触れることにより、社会人に対して敬意を持つようになっている。また社会人は、学生と触れ合うことで、若者への理解が進み、慈愛の念が生まれている。この授業を通して、世代を超えた人と人との関係性も同時に構築されたようである。

その他感想、改善点は次のとおりであった。これまでの考察と次の自由記述をふまえ、「まとめと今後の課題」について述べる。

■ 項目9. 感想, 改善点などがあれば記入してください。

【学生】

- 9.1 テーマを決め、調べて発表するというのを一人でしたのは初めてだったので、結構戸惑ってしまったけれど、終わった後は肩の荷が下りてすっきりだった。これからそんな内容が増える可能性が高いので、なんとか慣れるよう努力していきたい。
- 9.2 自分の考えは、あまり発表できなかつたのですが、他の方達のいろんな意見をきくことができてよかったです。また、プロフェッショナルのビデオもみることができ、面白かったです。口角を上げる!! 落ち込んだときに実践してみたいと思います。
- 9.3 プロフェッショナルについて考えるこの授業は、本当によかつた。友達に話をしたら、参加すればよかつたという人が結構いたので、宣伝があればもっと増えるかなと(思う)。
- 9.4 学生の参加者が少ない回もあつたのが少し残念だつた。とても面白い授業でした。有難うございました。

【社会人】

- 9.5 机の配置については、“コ”または“ロ”の字の形であつたが、議論を深めるためにもっと接近した配置でも良かつたのではないかと思います。
- 9.6 学生さんの参加が期待していた程でなく、少な過ぎたと思う。難しいかも分からないが、最低でも10人位は必要かと思う。
- 9.7 社会人の発言が多過ぎて、学生さんの発言が少なかつた事は、もう少し何とか前向きの進展を望みたい。バランスが良好となればよい。

4. まとめと今後の課題

(1) 共創型学習の授業における学習の意義

■ 世代間交流を通しての学び

これまでに述べてきたように、各個人の経験や知識、時代背景を交えてそれぞれの立場から「プロフェッショナルとは何か」について考え、交流した経験は、学生、社会人共に意義のあるものであり、それぞれの学びを促進していたことが分かつた。

学生にとっては、社会人が色々な意味でモデルとして作用していたことが考えられる。それは、生き方や仕事への態度など自己実現に関する枠組みと、学び方や振る舞いといった行動レベルでの枠組みにおいて参考となるモデルになつたようである。

また社会人にとっては、参加者として学びつつも、一貫して学生を理解し、支援しようとする態度が見られ、生き方や学び方を含めてよき理解者、支援者として関わっていた。この経験は、同時に社会人自身の知識や経験を活かす場となつていたようであり、社会貢献となりうる場であることも分かつた。

そして授業という場において、学生と社会人は「プロフェッショナル」という共通のテーマを通

して学びを深めていた。お互いの考え方・価値観を尊重しながら、相互理解を進め、それぞれの考えを深めていったようである。この授業を通して、学生は、「プロフェッショナル」として働いている人々の仕事の流儀を学ぶと共に、「生きる」という意味でスペシャリストである世代の違う社会人との交流を通して、多くのことを学ぶことができたのではないかと考える。

■ 自己実現と学び

学生、社会人共に自己実現的態度が促進された。特に学生は自分の目標に向かって努力しようとする姿勢が見られ、それが具体的な行動レベルまで及んでいた。すなわち、自分の人生や目標の中に学びが位置づけられ、内からわき起こる学びの意欲が促進されたことが窺える。しかし、学生が具体的にどのように行動していくかという実践の支援には至っていないため、今後は実践につなげていけるような支援を検討する必要がある。また、生き方を考える前に、今の自分を受け入れることが精一杯である学生もいることを考えると、そのための支援も考慮しておかなければならない。

社会人は、「プロフェッショナル」と呼ばれる人々と自分を重ね合わせることで、自分自身の生き方を振り返る機会となっていた。また、社会貢献として学生を支援していきたいという思いや、今後の社会貢献のあり方について考える機会となったようである。

■ 学び方を学ぶ

今回は、社会人も学生と同じように参加者として発表を行ったが、資料の作成や発表の仕方など「社会人を手本として学ぶ」という意味での効果が大きかったと考える。社会人は、自身の経験や参考になる事例、文献などをうまく組み合わせ、発表していた。まずは手本として社会人が最初に発表することとなったが、学生はその方法を参考にしながら授業の発表準備をしていたようだ。

また、文献に対する取り組み方については、学生は素直に取り組むのに対し、社会人は時代背景や著者の人物背景にも入り、自分の解釈を加える傾向があった。その中で、学生は社会人から多様な見方があることを学び、社会人は現代の学生の考え方に刺激を受けていたようだ。

(2) 授業改善

■ 参加者の確保

この授業は9・10時限目(16:20~17:50)に開講しており、学生、社会人共に参加しにくい時間帯であったことが考えられる。しかし、学生、社会人にとって意義のある授業であったことを考えると、この授業のよさを分かりやすく伝え、参加者を確保するための工夫をする必要がある。

学生への支援としては、学生の中には、面白い授業であったという意見や他の学生も興味を持っていたということから、シラバスを分かりやすくする、ウェブ上での情報提供など、どのような授業であるかを具体的に知らせる必要がある。

社会人に対しては、大学開放実践センターにおける公開講座の利用者に対して、具体的な情報提供をしていく必要がある。社会人がどのような立場で参加すればよいのか、気軽に参加できる授業であることを周知し、自身の知識と経験を活かせる場であることなど、この講義に参加することの

意義を説明していく必要がある。

■ 社会人の参加

またこの授業では、特に自己実現、生き方を学ぶことを重視しているため、参加者の経験や知識、性格特性などによって授業内容が左右されるところがある。議論を通して参加者が共有していく中で、その人が生きてきた文脈を含めて、生きた知識を得ることができる。また、社会人の学生へ歩みよる姿勢や支援していこうという態度が、学生へプラスの効果を与えていたことを考えると、社会人の関わり方や性格特性の影響も大きい。

■ 教員による支援

教員は各参加者の知識と経験をうまくつなげ、そこから意義のあるものを生み出して皆で共有していくような支援をすることが必要である。すなわち、人と人の知識をつないでいくと共に、人と人のネットワークを構築するための支援をするファシリテーターとしての役割が重要になってくる。つまりこの授業では、幅広い考え方や価値観を理解し、参加者の知識と経験を学びと結びつけて共有していくコーディネートが重要になってくる。

特に前半の授業において、学生は社会人と比較して発言が少なく、発表や議論の中で、考えをまとめて発信することにも不慣れであった。社会人が学生に寄り添うかたちで接したことや、担当教員から、学生を指名して発言を促したり、間違えを恐れず、自分の意見を自由に発言してよいと何度も説明したりしたことで、発言の数も増え、積極的な態度が見られた。しかし、十分なレベルには到達していなかったため、今後は具体的に、学生の発言を引き出していく手法を検討していくことが必要である。

この授業のような参加型スタイルの学習では、発表に至るまでのテーマの決め方、資料の探し方、まとめ方など発表する際の留意点や、自分の考えを分かりやすく伝える方法、相手を尊重しながら自分の意見を伝えるなどのディスカッションの方法など、議論をする際の留意点についても具体的に支援することが必要である。

以上をふまえて、この授業における学びを促進するためには、参加者間のディスカッションを支援すること、またアカデミックスキルに関して言えば、世代の違う社会人や学生、教員とのコミュニケーションスキル、自身の思いをまとめて他者に伝えるためのプレゼンテーションスキルを向上させるための支援が必要である。特に学生が一人で出来ないことを出来るように、教員が足場かけ(支援)をすることが最も重要なことであることがわかる。現代の大学生、特に初年次の学生においては、以上の支援により、意義のある学習が展開されると思われる。

(3) 今後の課題

今回は、参加者が少数であったこと、試験的な試みであったことから、授業の全体的な課題の把握にとどまったが、今後は、社会人参加型の授業の意義を明確にし、質的な分析を検討する必要がある。具体的には、先に述べたように、世代間交流を促すための授業設計やコーディネートをより

充実させ、社会人との意義のある交流を促進し、学生がより主体的に学べるよう工夫することが必要である。そして、学士力にあるような力について、この授業において学生がどのような力を身につけたのか、また、そのような力を評価しうるのかも含めて検討が必要であろう。

さらに、対話分析を加えて実施し、その他の評価データ、成果物もふまえて、学生、社会人の個人の成長プロセスを捉えるなど、質的な変化を捉えていくことも必要である。これらのデータを基に、学生、社会人の学習の意義を明確にする詳細な分析を進めていかなければならない。

最後に、教員自身が幅広い教養を持ち、授業テーマについて十分な知識を持った上で、アプローチの仕方を明確にし、学習の支援を行う必要がある。今後は、教員自身の変容過程やアプローチの仕方とその効果についても検討していかなければならない。

注

- 1) OECD の DeSeCo プロジェクトでは、成人の能力概念を整理し、新たな定義を行おうとしている。それが「キー・コンピテンシー」である。Dominique Simone Rychen, Laura Hersh Salganik, 立田慶裕 (訳) (2006) 『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして』明石書店。
- 2) 現代の高等教育における新たな能力概念とそのカリキュラム設計、能動的な学習を促進する学習スタイルについては、次の先行研究に見られる。
 - ・沖裕貴 (2007) 「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造—理念・目標、ディプロマ・ポリシー、シラバスとの関連において」『立命館高等教育研究』7, 61-74頁。
 - ・松下佳代 (2007) 「コンピテンス概念の大学カリキュラムへのインパクトとその問題点— Tuning Project の批判的検討—」, 『京都大学高等教育研究』13, 101-120。
 - ・溝上慎一 (2007) 「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」名古屋高等教育研究, 7, 269-287。
 - ・溝上慎一 (2007) カリキュラム概念の整理とカリキュラムを見る視点—アクティブ・ラーニングの検討に向けて—。京都大学高等教育研究, 12, 153-162。
- 3) このプログラムは、「教育の質の向上につながる教育取組の中から特に優れたものを選定し、広く社会に情報提供するとともに、重点的な財政支援を行うことにより、我が国全体としての高等教育の質保証、国際競争力の強化に資することを目的」として始められたものである。(平成20年度より文部科学省の新事業として開始)
- 4) 「地域社会人ボランティアを活用した教養教育」の詳細は、ホームページ参照のこと。
<http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp/>
- 5) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」平成20年12月24日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm
- 6) 茂木健一郎, NHK 「プロフェッショナル」制作班 (編集) 『プロフェッショナル 仕事の流儀』

< 1 巻2006/04～15巻2007/09 >

* Web ページのアドレスに関しては、2009年3月31日現在のものを掲載している

Abstract

In Higher Education, we have to define and make clear about diploma policy, and to focus on what we provide for the student's experiences, how to develop the student's generic skills, and how to assess student's outcomes. In this viewpoint, we did make a challenge to put into practice a new general education class called "Seminar for Reading Great Books" through interaction with the members of the community participating. In this class, students learned about the theme "Professional" and made discussion with the people in local communities.

This study aims to make clear the problem of learning in our new trial. We considered the problem from the questionnaire about learning experiences in this class. As conclusion, it was made clear that we have to redesign for facilitating the discussion between participants for learning, and for scaffolding learners to develop academic skills, especially communication skill, and presentation skill for enhancing significant learning.